

「在村医師親子の日記を読む」解説

1 資料について～比企郡番匠村（現ときがわ町）小室家文書

（1）番匠村について

- ・ 秩父山地から関東平野に続く途中の緩やかな斜面＝都幾川の河岸段丘上に位置し、JR 八高線明覚駅がある。
- ・ 元禄 10 年（1697）に幕府領から旗本佐久間氏知行地となる。村高 236 石（元禄郷帳）、畑方約 25 町、田方約 5 町（寛文 8 年（1668）「御縄打水帳」小室家文書 11～14）。
- ・ 江戸までの行程 16 里（「新編武蔵風土記稿」、明治初年の戸数 68 戸、人口男 157 人、女 152 人、産業は米や繭を多く産し養蚕と絹取引が盛んな地域（『武蔵国郡村誌』）であった。

（2）小室家について

- ・ 元は竹内姓で、戦国時代には越後の上杉氏に仕え、その後、越前国足羽郡に移住し福井藩の藩士として 100 石を知行していたという。
- ・ 初代田代元貞 元禄 15 年（1702）～安永 6 年（1777）
享保年間（1716～36）に鎌倉、さらに江戸へと移住。望月三英（幕府表番医師、奥医師 漢方医学）の塾で医道を学び、医を生業としての遊歴の後、番匠村に落ち着いた。
- ・ 二代田代通仙 享保 17 年（1732）～文化 3 年（1806）
- ・ 三代小室元長 明和元年（1764）～安政元年（1854） 91 歳で没
江戸で幕府医官山田凶南に医学を学んだ後、賀川流産科術（近江国彦根出身で鍼灸や古医方を学んだ賀川玄悦が独学で生み出した助産術）を修得。蘭方医学にも関心を強め、家塾如達堂で多くの門人を指導した。医師であるとともに、享和年間（1801～04）には名主後見、文化 9 年（1812）前後には名主役。
- ・ 四代小室元貞 寛政元年（1789）～安政 5 年（1858） 70 歳で没
西洋産科の祖と称せられる足立長雋（丹波篠山藩主侍医）に師事し、文政 7～8 年（1824～25）頃に如達堂主を、続いて文政 10 年（1827）に家督を継承した。村役人に就くことはほぼなかったようである。
- ・ 五代小室元長 文政 5 年（1822）～明治 18 年（1885） 64 歳で没

（3）小室家文書について

- ・ 総点数 7,622 点（埼玉県指定有形文化財 歴史資料）
- ・ 近世・近代文書は 634 点で、医学書や医事記録、書簡、典籍、書画・

拓本などに特色がある。

(4) 小室家日記について

- ・ 三代元長日記 25 冊、四代元貞 24 冊、五代元長 17 冊の延べ 66 冊が確認されている。
- ・ 内容は、近世後期から明治初期にかけての医療の様相、医師・蘭学者・漢学者・俳人といった人びととの交流の様子、村落や人びとの暮らしの諸相を伝える。
- ・ 三代元長の日記は 63 歳の文政 9 年（1826）からで、記事が中断する時期も含め嘉永 4 年（1851）のものまでが確認できる（延べ 26 年間）。当初は日記の表題が固定しないが、天保 4 年（1833）の 6 冊目の日記からは、ほぼ『忽忘』などと題された。
- ・ 四代元貞の日記は 44 歳の天保 3 年から同 8 年の 5 年間で、1 冊目が『玄亭日記』であるほかは、2 冊目から 12 冊目まで『如達堂日記』、13 冊目から 20 冊目まで『如是庵日記』と号を冠した表題となっている。一冊に書き留められる期間が 2～3 か月ほどと短く、一日ごとの記事の分量が多く短い期間の記録ではあるが情報量は多い。

2 天保 5 年の社会状況について

(1) 天保 5 年の気象

- ・ 取り上げた日記の時期は天保 5 年（1834）6 月 1 日から 3 日にかけてで、1 日は陽暦では 7 月 7 日にあたる。前年冬に始まり同 8 年まで続く天保の飢饉にあたる時期の夏の様子である。
- ・ 日記では 1 日が快晴のほかは雨が続けているが、この年の夏から秋は暑い日が続き、各地で旱害被害が続いたと言われる。参考に大宮氷川神社神主東角井家日記から引用する。
 - 6 月 1 日から照り続き、24・25 日に少々降ったが、また照り続き、7 月 21 日にようやく大雨
 - 神領の新開村の田は 6 月から 7 月までの照り込みで「白割」になり、稲の生育は至てよくない。そのうえ 8 月は 2 回大嵐があつて「吹折」、「不熟青立」になった
- ・ 浄国寺日鑑（さいたま市岩槻区）、三峯神社日鑑（秩父市大滝）、如達堂日記（ときがわ町番匠）による天候
 - 5 月 （5 月 24 日＝陽暦 6 月 30 日）

日	岩槻	三峯山	番匠村
24	晴	晴天	全晴
25	—	雨降	曇ル
26	曇	雨降	曇ル

27	—	曇ル	晴ル
28	—	少晴	蒸暑、夜中雨
29	—	雨降	雨
30	—	少晴	大雨、七ツ頃より晴ル、夜中全晴

○ 6月 (6月1日=陽暦7月7日 6月29日=陽暦8月4日)

日	岩槻	三峯山	番匠村
1	曇	晴天	快晴
2	雨	昼後雨降	四ツ時より雨
3	—	雨降	雨
4	—	曇ル	雨
5	晴	少晴、昼後雨	晴ル、雲有、暑気相当
6	晴	少晴、昼後雨	曇ル
7	雨	晴曇	霧降、七ツ頃より晴暑シ
8	—	晴天	晴、暑気甚敷候
9	晴	晴天、大夕立少雷	朝曇ニ而暑強シ
10	晴	晴天	朝より全晴、暑気強シ
11	晴	晴天、多少雨夜ニ入晴	朝曇り晴ル、暑気強シ
12	晴	晴天	全晴
13	晴	晴天	晴ル
14	晴	晴天、大夕立少雷	朝曇り、晴夕立少々無雨
15	夕立	晴天、夕方雨降	—
16	晴	晴、昼後雨	全晴、暑気甚敷候
17	晴	晴天、昼少雨後晴	晴ル
18	晴	晴天	暑気強シ
19	晴	晴天	曇ル
20	晴	朝晴、昼前より曇、夕立大雷	暑強シ
21	—	晴天	全晴、暑強シ
22	晴	晴天	—
23	晴	晴天	全晴、暑強シ
24	晴	朝曇、昼後雨降	曇ル、午時雨少々、晴て七ツ時雨少々
25	雨	雨降、未中刻晴	雨、八ツより晴
26	晴	晴天	全晴、暑強シ
27	晴	晴天、大暑	全晴、暑中一番暑也
28	晴	快晴、大暑	暑気強シ
29	晴	晴天、甚暑	朝曇り

(『新編埼玉県史 別編3 自然』及び小室家文書397より作成)

(2) 江戸の大火～甲午火事

- ・ 2月7日(陽暦3月16日)に神田佐久間町から出火、北西風により延焼。日本橋、小石川など13日まで続いて出火があり、死者4000

人に及んだとされる

- ・ 如達堂日記での記述
 - 七日 晴、大風、江戸大火
 - 八日 晴ル、静、四ツより風
隣政右衛門殿被参、大月之もの松山江引懸立寄物語ニ、昨七ツ時より江戸大火之由・・・
 - 九日 晴、静
元貞松山宿小高佐太郎江行、帰路一市ニ而小杉彦兵衛ニ承候処、江戸出火泉橋より始り・・・
小川江人差遣江戸出火之様子承候処駈と相分り兼候、作兵衛殿今出立ニ而江戸江見舞ニ罷出候由ニ候間、一兩日中ニ慥ニ相分り可申候
 - 十日 晴 大風
小川忠兵衛より手紙左之通
江戸大火事ニ付鳥渡為御知申上候・・・
右之手紙故甚心配罷在候得共、大人留守之事故出府も相成兼、飛脚ニ而ハ分兼可申候、二三日見合申候
大塚左兵衛夜中人遣し、江戸浜丁辺焼亡之由申来候
 - 十一日 初午、晴ル、風有
江戸火事見舞之手紙認候
山下惣七殿シロ縄求持来ル、代一朱遣百五十文計帰ル、尚明日川肥江行ニ付、右手紙頼候
 - 十二日 晴ル
元貞今宿九左衛門殿江行、路ニ而旅人体之者逢候間承候処、江戸より帰ルと申候間、火事之様子承候処・・・
舎老人入来、年玉、早々江戸火事之物語右ニ相類申候、

3 語句の解説

(1) 語句

- ・ 遷延（せんえん）
長引くこと。のびのびになること、のびのびにすること。
現代でも「遷延性意識障害」「遷延性うつ病」など、医療用語で用いられている。
- ・ 神経熱
参考「扶歇蘭土神経熱論／扶歇蘭杜神経熱経験説」
原著：1809年和蘭刊、坪井信道 訳
「泰西熱病論」文化11年に「遷延神経熱篇第七」がある。

(2) 登場人物と地名

- ・ 元貞：四代小室元貞
- ・ 勉中：椎橋勉中。元貞門人。当時在塾中。
- ・ 容敬：安藤容敬。元貞門人。当時在塾中。安藤文沢弟。
- ・ おてつ：元貞長女。旗本水野氏奉公中大火罹災、その後神保氏に移るものの人減らしで帰郷。その後縁談が進み、この年12月に高麗郡楡木村（現日高市）名主新井家に嫁入り。
- ・ 小川伯父／忠兵衛：比企郡小川村組頭林忠兵衛。元貞妻みきの弟、おてつの伯父。
- ・ 栄林子筆屋：江戸でのおてつの世話をしている。天保4年には「娘事奉公向勤り兼候由、筆屋江廿一日ニ少々之暇相願下ケ申置候」とあり、この年2月の大火時にも安否が心配されている。
- ・ 大人：三代小室元長。
- ・ 大谷綿屋：入間郡大谷村（現越生町）の綿屋善八。元貞のほか、容敬・勉中が往診している一方、綿、「誂もの」を購入しており、歳暮や年始のやりとりがある。
- ・ クマイ来波：比企郡熊井村（現鳩山町）の老人。癪気などで元長、元貞が往診している。
- ・ 道具屋忠二郎：入間郡北浅羽村（現坂戸市）の研屋のことか。北浅羽の忠二郎からは大小の刀や拵、目貫などの刀装具を求めている。
- ・ 大野伝兵衛：比企郡大野村（現ときがわ町）の薬屋伝兵衛。往診のほか番匠村名主仲右衛門の最合にも参加している。
- ・ 平兵右衛門：比企郡平村（現ときがわ町）の兵右衛門。主に元長が往診しており、盆や年始の贈答も交わしている。
- ・ 大塚左兵衛：比企郡大塚村（現小川町）の左兵衛。診療にとどまらず弟子の世話、年始での酒盛りなど親交が厚く、2月の江戸大火の報を夜中に知らせてくれている。
- ・ 横田村源五郎：比企郡上横田村あるいは下横田村（いずれも現小川町）の源五郎。
- ・ 比留間半蔵：高麗郡梅原村（現日高市）在住の甲源一刀流剣術家。父与八が逸見太四郎の門で剣術をきわめ、半蔵がこれを継いだ。おてつの仲人を務めるなど親交が深い。
- ・ 元司：横田元司。比企郡中尾村（現滑川町）住で、この時期熱病で元貞の往診を受けている。翌6年4月入塾。
- ・ 竹本：比企郡竹本村（現鳩山町）。名主保積良助に元長の姉やすが嫁いでいる。
- ・ 青山：比企郡青山村（現小川町）。川久保はその字。
- ・ 本田：男衾郡本田村（現深谷市〔旧川本町〕）



出典：次の URL の国土地理院ウェブサイトに加筆作成
<https://maps.gsi.go.jp/#15/38.163935/138.388188/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1>

○参考文献

- ・ 埼玉県編『新編埼玉県史 別編3 自然』（埼玉県、1986年）
- ・ 埼玉県立文書館編『小室家文書目録』（同館、1997年）
- ・ 都幾川村史編さん委員会編『都幾川村史資料4（5）近世編 明覚地区Ⅰ』、『同4（6）近世編 明覚地区Ⅱ』（都幾川村、1998年）
- ・ 都幾川村史編さん委員会編『都幾川村史 通史編』（都幾川村、2001年）
- ・ 埼玉県教育委員会編『埼玉県史料叢書22 小室家文書一』（埼玉県、2019年）
- ・ 細野健太郎「近世後期の地域医療と蘭学－在村医小室家の医業を中心に」（『埼玉地方史』43、2000年）
- ・ 芳賀明子「武州比企郡番匠村の老医師小室元長の日記－文政九年から嘉永四年まで」（『文書館紀要』28、2015年）